

デカートの倫理思想とカントの倫理説

朝永三十郎

知らるる如くデカートには倫理學に關する特別の著書はない、吾々は唯「方法叙説」第三部に出て居るデカートの實踐道德訓「感情論」の一部、公主エリザベートに奉げて「眞福の生活」[*vivre en beatitude*]を論じた諸尺牘、女王クリスチーネに奉げて愛及び至高善を論じた諸尺牘等に依て彼れの倫理思想を斷片的に窺ひ知り得るのみである。而して「方法叙説」中の件の部分は彼自らも特に「假りに」[*par provision*]と斷つて居るやうに彼の思想未熟期に於ける當座の處世訓にすぎずして全然組織的論述を缺いて居り「感情論」の一部も亦唯感情の説明——其根本的性質に於て全然自然科學的なる——の傍ら偶々感情の價值論に接觸したに止まつて倫理の組織的研究ではない。他の尺牘は専ら純然たる倫理問題を題目としたものではあるが併し其成立の目的の結果のづから通俗的となつて緊密と精緻とを缺いて居る。其結果デカートの倫理説は

普通の哲學史に於て極めて閑却されて居るのみならず、例へばクーノ・フィッシャーやホフマンやの「モノグラフィ」に於てすらも極めて輕視されて居る。併、前舉の書き物を読み行くうちにカントの倫理說中に於ける種々の重要な觀念に逢着する様に思ふ。無論此事實よりして直ちにカント及びデカートの倫理說の間に直接の史的交渉があつたとするは速斷であらう。兩者間の類似は唯兩思想家間に存ずる精神的素質の類縁に基いて成立つて居るとも考へられるし、或は兩者が共通に影響を受けた第三者(殊に「ストア」)を介して成立つた者とも考へられ得るかも知れぬ。併、デカートの形而上學及び認識論上の思想は屢カントに引用され又は批評の對象とされて居り、又其自然哲學上の思想もカントの *Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels* や *Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte* などの中に批評又は引用されて居るし、而してカントは多くの場合デカートをば批評又は論駁の對象としては居るが併し其批判論や自然哲學に於てはデカートの影響が否定さるゝことは出來ないといふ事實より推して、倫理說に於ける兩者の類縁も亦或程度迄は直接の影響に依りはせぬかといふことは少くとも問題とされ得ると思ふ。併しそれは此處では疑問として殘し、唯兩者間の類似點を少しく考查して見やうと思ふ。

カントの倫理説の根本特徴を構成する中心觀念は知らるゝ如く、嚴密なる意味に於て善と言はるべきものは意志のみ、而して如何なる場合に意志は善と言はれ得るかと言へば道德法の尊敬又は義務意識が唯一直接の動機となつて居る場合のみ、一毫たり共其以外の動機が協力するならば其意志は道德性を缺損する、といふとであつて、此觀念を發展または徹底せしめた結果、彼れの倫理説の特異性を構成する所の種々の派生的様相例へば其特有なる徳論、排結果論、排快樂論、人格の品位又は尊嚴といふが如き諸觀念が成立つて居る。今此根本特徴及び其派生的様相が果して、或は如何なる形、如何なる程度を以て、デカートの思想中に存するかを考査して見たい。

併し今其一々の項に就て考査する前にデカートの倫理説の綱要を一瞥して置くことが便利であると思ふ。デカートの倫理説は大體「ストア」説の精神を基礎とするものであるが、併しそれが最多く影響を受けたのは原始的「ストア」説でなくして著しく折衷的傾向を帶ぶる様になつた羅馬の「ストア」説、就中セネカの思想であり、而かもセネカよりも一層折衷的傾向に富み、「ストア」をば「アリストテレス、エピクテロス等

と調和して之を穩健化せんとしたものである。穩健化された「ストア」説といふことは種々の機會に斷片的に發表された彼れの倫理説を一貫した一般特徴である。

デカールトが有した倫理觀の最幼稚な形のは彼れが「方法叙説」に於て彼れの思想未熟期に於ける「當座の」處世訓として掲げた實踐道德訓三則、即ち（一）祖國の宗教法律、習慣に順依し、吾々が生活を共にせざる可らざる人々の中、最聰明なる人々に依て實踐上一般に承認されたる最穩健にして中庸を得たる意見に従へ、（二）一度決心せし事は充分の理由なき以上決して變更する勿れ、強固なる意志を以て之を遂行せよ、（三）運命（fortune）よりも己れに打克つべく努めよ、世界の秩序よりも己れの欲望を變更せんと努めよ、吾々が自由に左右し得るは唯己れの思想（pensées）のみなることを常に心に銘せよ、といふに要約され得る者であつて、此中に既にかの根本特徴を見ることが出来るが、後に現はれた彼れの倫理説は畢竟此根本思想を多少學的に開展し精鍊したものに外ならない。其倫理説の最纏まつて現はれたものは、量の上では極めて貧弱ではあるが、エリザベート及びクリスチーネに送つた尺牘中に於ける至高善論であるが、其處では彼れは自ら明かに、エピクトロス、ツエーノーン、アリストテレスの三説を調和する旨を言明して居る。

彼れに依れば、善 (bien) といふにも種々の意味がある。第一は絶對的意味に於ける善、即ち吾々が或ものをば吾々との關係を離れて其自身に善であるといふ場合の其れである。善を此意味に解するならば至高善とは萬物を越えて至上に圓滿なる神の外にはない筈である。併し吾々はまた或ものをば吾々に關係せしめて善であるといふ。但し此意味に於ける善の中にも亦吾々が來世に於て享け得ると待期するところの超自然的福祉といふが如きものと、吾々が現世に於て有し得るものとの別があるが今問題とする、且つ古來多くの哲學者が問題として來たのは後者である。併し斯く解しても至高善は尙ほ二様の意味に解せられる。第一は人性一般の至高善、即ち全人類中の最完全なるものが達し得べき最高度の善である。斯く解すれば至高善は吾々が有し得る精神上、肉體上、及運命より來る一切諸善の總和となるであらう。斯の如く解するならば至高善をば精神及び肉體の兩面に亘つた人性に可能なるあらゆる完全性の結合であるとしたアリストテレス説は正當である。併し吾々が今問題とする至高善は此意味ではない。各個人が如何なる精神、如何なる肉體、如何なる運命を有するに拘らず各自に收得し得るところの最高貴なる善である。而して其れは、デカールに依れば、理性が、命ずる、一切のことをば、感情若しくば、衝

動に妨害せらるることなく實行せんとする強固且つ恒常の決心 (ferme et constante résolution d'exécuter tout ce que la raison lui conseillera, sans que ses passions ou ses appetits l'en détournent — Oeuvres 4, 265) 或は「正しきことを爲さんとする強固なる意志」(ferme volonté de bien faire — Oeuvres 5, 82) としての徳の外には無い。何故かなれば此の如き意味の徳にして初めて、(一)吾々が精神、肉體、運命の如何に拘らず確實に有し得るものであり、而して(二)吾々に眞福 (beatitude) を與ふるものであるからである。

先づ第一の點より考查すれば外界即ち肉體及び運命に依る諸善が吾々の自由に依存しないことは言ふまでもないから至高善は内界に求められねばならぬ。併し内界と雖も悉くは吾々の自由の圏域に屬しない。知識は吾々の内界に屬するが併し吾々が自由に左右し得ざる吾々の能性及び境遇に依存する。斯くて吾々の自由の範圍に屬し吾々が絶對的に支配し得るは唯自己の意志のみである。知識其者は吾々の自由に依存しないが、併し知識を求めんとする意志は吾々の自由に依存する。吾々は正しきことを完全に知り且つ完全に之を行動に表はすことは出來ぬとしても、しかせんと意志することは出來る。此の如き意志此の如き決意を絶えず確實に持續することが徳である。

而して人生の最大且つ最確實なる心の満足 (*contentement de l'esprit*)、即ち眞福は此徳よりして初て成果して來なければならぬ。其理由としてデカールが擧げたことは大體二項に分けることが出来る。而して之に準じて又デカールの所謂眞福には二の契械を含むで居る。尤もデカール自身の論述は斯の如く明確になつて居るのではないが併し彼れの論述の纏れを解きほぐせば其處に吾々は明かに二條の糸筋を發見し得ると思ふ。第一に、吾々の自由に依存せざるものより來る満足は絶えず不安や、後悔や、遺憾 (*regret*) やを伴ふ、吾々は唯々吾々の自由に依存するもの即ち徳のみ
に價値を置くことに依て初めて此不安や、後悔や、遺憾やを離脱し得るといふ、ストアの影響の結果と見らるべき思想がある。此契械は、方法説話に於ける實踐道徳訓の第三則の下に最鮮明に現はれて居る。其處に彼は下の様に説いて居る。吾々の外にある一切の諸善をば同時に又た吾々の力の及ばざるものと考へるならば、たとへ其れを缺けばとて、吾々は其れが吾々の過失でなき限り、恰かも支那やメキシコの王國を我有とせざるをば何人と雖も遺憾とせざると同様、遺憾とするに足らぬであらう。恰も金剛石の如き壊類し難き物質より成る身體を有ち飛ぶに鳥の如き羽翼を有たんことを願はざると同様、病みては健康を願ひ、虜囚の身となつて自由を求む

るといふが如きことも無さに至るであらう。昔の賢哲がよく頼むに足らざる運命の繫縛を離脱し、苦痛と貧困とに居りながら其の幸福を神々と競ひ得たるは實に此點に於ける修養の結果に外ならぬ。(Oenaves, 6, 26) エリザベートへの書翰に於ても亦デカートは此實踐道德訓を引用して、等しく第三則の下に同様の趣意を反覆し、眞に吾々の心の満足を妨害するものは欲望(*desir*)、遺憾(*regret*)、後悔(*repentir*)の外は無し、而して是等の感情は吾々の力以外のものに價値を置くよりして起る(Oenaves 4, 26) (其故に確實なる満足を有せんが爲めには徳に従はねばならぬ(… pour avoir un contentement qui soit solide, il est besoin de suivre la vertu … Oenaves 4, 27)) と言ひて居る。

第二の契械は自由的存在者としての自己に對する尊敬、即ちデカートに依れば眞純なる意味に於ける自尊と結付いて起る内的法悦 *inner rapture* とも稱すべきものである。第一契械は眞福に於ける消極的契械、第二は其積極的契械であつて、而して又た最重要なものでなければならぬ。何となれば消極的契械のみにては眞福は單なる無苦の状態、言はゞ空虚の状態であつて、吾々の強き希求の對象となるものであり得ないからである。併し此契機に就ては尙ほ後に叙説すべき機會があるから此處では省略する。

要するにデカルトによれば前述の様な意味な於ける徳は吾々の自由の圏域に屬する唯一の者として、又た前述の如き消極及び積極兩様の契機を含む至純の幸福を必然的に伴ふ者として、吾々に取て至高善である。但しデカルトは又此徳と眞福との結付いたものをば至高善なる語を以て示した場處もある。即ちクリスチーネへの書翰に彼は明確に、至善は「唯、正しき事を爲さんとする強固なる意志と其が生ずる所の満足とより成立つ」(Oeuvres 6, 82)と説いて居る。併しエリザベートの書翰に於ては前に叙述したやうに徳即至高善を説き、眞福(Beatitude)、至高善(souverain bien)及び究極目的(derniere fin)の三者を明確に區別して三者の關係を下の様に説いて居る。眞福は至高善に非ずして之を豫想する、即ち吾々が至高善を所有するよりして成果する心の満足である。而して行爲の究極目的としては兩者の何れをも認めることが出来る。何となれば至高善が、一切の吾々の行動の目的たらざる可らざるものなるは言ふまでもないが、其より生起するところの心の満足も亦吾々をして其を求めしめる所以の「誘引物」attraitなるが故に之を吾々の目的と呼ぶべき充分の理由があると。(Oeuvres 4, 275)但し眞福を至高善の内容とするとせぬとは思想の實質上には重要な關係はない。デカルトが考へる様に純なる心の満足は徳の必然的、伴隨物である、兩

者は不可離的である以上、其れを至高善の中に含めるや否やは事柄其者の問題でなく、寧ろ言葉の問題である。唯此處に重要なとはデカールが此心の満足を行行動の目的、又は動機とすることを明白に許して居ることである。

斯くてデカールは至高善の概念の定め様によつてはアリストテレス説にも成立の餘地あるとを認め、更に彼自身の至高善の概念に於ては大體「ストア」の上に立ちながら之をエピクテロスと調和せんとした。彼によれば若し快樂なる語を不純の快樂、必然的に不安、倦厭、後悔等を伴ふところの感官の快樂の意味に解するならば多くの評家の考へる様に快樂説は徳を誘進せずして不徳を奨励する結果に了らねばならぬ。併しエピクテロスの快樂は之に限らず、一切の心の満足を含んで居る、而して一切の心の満足中最純なるものは徳と伴ふが故に之を目的とするは同時に徳を誘進する所以である。(Oeuvres, 4, 275)

三

前に叙したデカールの至高善論は、其出發點に於て彼れが限定した至高善の概念より推して、カントの至高善(bonum supremum)又は完成善(b. consummatum)の論に相當す

るものでなくして、道德的善及び徳の論に相當するものなることは明かである。而して其處には、嚴密なる意味に於て善と言はれ得るものは意志のみといふカント倫理説の中心觀念、而して其必然の結果としての、意識的且つ有意的に義務の命令に従ひ得る意志の強^ろ Willensstärke (die moralische Stärke des Willens eines Menschen in Befolgung seiner Pflicht) の外には徳は無いとするカントの徳論が不純な不徹底な形を以てではあるが可なり強く現はれて居ることが略看取され得る。前の叙述に依て察せられ得るであらう様にデカルトは善なる語をば非常に雜駁な意味に用ゐて居るが併し道德的に善と言ふべきものは理性に依て指導されたる意志と、斯く意志せんとする強固且つ恒常の決心としての徳の外には無い。而してデカルトは「私が徳と見らるべしと信ずるは此決心の強固である、但し私は從來何人かゞ其れを斯く定義せしことを知らないが」(Oeuvres 4, 265)と説いて此徳論をば自己の創見として誇つて居る。

此思想の直接の結果としてデカルトの倫理説にはカント論理説の重要契機たる反結果論的思想も可なり鮮明に現はれて居る。吾々が理性の指導に従て不動の意志を以て行動する場合には「爲されたる事柄は悪くとも、其れにも拘らず吾々は己れの義務を爲せしとを確信する、之に反して若し吾々が或有徳的の行動をなし而も不

徳を爲すと思ふならば、若くは自己が何を爲しつゝあるかを知らんとせざる場合と雖も、吾々は有徳の人として行動するとは言へぬ」(Deuvres 5, 84)。即ち説き方は極めて不精確ではある(何となれば後の場合には其實「或有徳的の行動をなす」とは言へぬ)が、兎に角、行動の善なるは結果に存せずして意志にある、動機の悪なる場合は言ふまでもなく、明確なる義務意識に依て直接に決定せられざる場合と雖も、行動は倫理的に善であるとは言へぬといふカント風思想は頗る明確に現れて居る。

但し、此思想と必然的に結付いて成立つべきカント倫理説の反快樂論の様相はデカート説に於ては、エピクテロス説に對する讓歩の結果徹底を缺いて居ることは否定出來ない。デカートに於ては徳は其自身に絶對的價値を有するといふ思想と、其れが眞福の生源なる故に價値を有するといふ思想とが混淆して存在して居る。尤も吾々は此處ではデカートが「心の満足」をば徳の必然的の伴隨物又は結果とし、若くは更に進んで至高善の内容とまでしたと、之を行動の目的又は動機としたこととは別にして考へねばならぬ。前の思想は必ずしもカントの思想と矛盾しないと思ふ。カントと雖もデカートが考へた様な意味に於ての「心の満足」が善き意志又は徳に伴ふこと、「人生の多くの刺激や怡樂 so viele Reize und annehmlichkeiten des Lebens」が此動

機(義務意識)に結合せらるる(Oritik d. p. V. Werke II, S. 114)ことを否定しては居ない。唯デカールが快樂をば明かに行動の「目的」又は「動機」と認めたエビクローヌ説を是認する(· Epicure n'a pas en tort, considérant en quey consiste la bonté de, & quel est le motif, ou la fin a laquelle tendent nos actions, de dire que c'est la volupté en general, c'est a dire le contentement de l'esprit Oeuvres 4, 276)點にカントと根本的の相違がある。殊に彼れがエリザベートへの書翰に於て例を射的に取つて、徳は標的、心の満足は賞品、標的を見るのみにては人は射んとの意志は起さぬ、意志を刺激するは賞品である、併し賞品は必ず的中に伴ふ、之と同じく徳は其自身のみにては意志を刺激する力はない、意志を刺激するは満足を求むる心である、併し満足は徳の實行に依るに非ざれば得られぬ(Oeuvres 4, 277)と説いたのは、女性の理解力に順應せんが爲に卑近の例に訴へたものとして幾分辯護の餘地があるとしても、道德的の心術を其根源に於て不純にする點に於てカント説と矛盾するのみならず、彼の思想の基調をなす「ストア」的精神及反結果論とも調和が困難である。

四

自由的存在者としての人格の品位又は其尊嚴といふ思想はデカールに於て頗る

明白に現はれて居る。

第一にデカールによれば嚴密なる意味に於て賞讃の對象となり得るは唯人間の
みである。何となれば賞讃の對象となり得るは自己の行動の創作者として其行動
に對して責任を有し得るものでなければならぬ。而して其れは唯自由意志を以て
行動するもののみでなければならぬ。従つて自動機械は其の對象であり得ない。而
してデカールの形而上學及び人性論によれば萬有中精神と肉體と結付いたもの、従
つて自由を有するものは唯人間のみ、人間以下の一切は純粹なる物體其行動は凡て
機械的である、他の一切の生物は唯の自動機械に過ぎぬ。

……人間の最高完全性は彼が意志に依て、即ち自由に、行動する點にある。之に依て彼は獨特の仕方を以て彼れの行動の創作者で
あり、従つて又之に依て賞讃を値し得る。何となれば吾々は自動機械が其れが營むべき運動を精確に營だとして、其れが必然的に營
まるゝが故に之を賞讃せぬ。之に反して此機械をば斯くまで精確に製作し得たる技術家をば、彼れが必然的でなく自由を以て之を
製作せし故を以て賞讃する。(Principia Philosophiae I, XXXIV)

更に自由意志は單に吾々人間をして稱讃の對象たらしむる所以の特徴であるの
みならず、又た吾々が有するもの、中唯一の無限なるものとして最偉大なるもの、最
高貴なるもの、吾々の裡に於ける神、其者の映像とも言はるべきものとして其自身神
的であるとも言はるべきものである。

…：悟性の表象作用の範圍は單に其れに表示される僅少の事物のみに限られる、従つて常に極めて制限されて居る。然るに意志は之に反して或意味に於て無限なりと言はれ得る。何となれば、吾々は或他の意志の對象となり得るものにも、或は神に於ける廣大無邊の意志の對象たり得るものにさへも、吾々自身の意志が其範圍を押し擴げ得ざるものを考へることは出来ないから……

(Principia Philosophiae I. XXXV)

(取意) 私の裡にあるものの中に於て意志又は決意の自由の能力ほど完全にして偉大なるものは無い。例へば理解力に就て見れば私は其れが私の内に於て非常に微小且つ極めて有限なることを直ちに認知する、而して其れと同時に私はこれよりも遙か大なる最大にして無限なる或他の理解力の觀念を作る。而して私が其觀念を作り得るといふ、その事實よりして其れが神の性に屬することを明晰に知る。之と等しく想起、想像、其他如何なる能力を考查するとしても、私は常に其れ等が私の内に於ては甚だ微弱にして局限されたものなること、而して神に於ては之に反して廣大無邊なることを認める。然るに獨り意志即ち決意の自由のみは私の内に於て、非常に大にして、私はより以上に大なるものゝ觀念を考へるとは出来ぬ、而して私が言はゞ神の映像又は肖像を宿すこと、ことを知るは主として之に依るのみである (Galeo ut illa praecipuo sit, ratione cuius imaginem quantum, et Similitudinem Deum me referre intelligo—Meditationes 152)

…：自由意志は吾々をば或仕方にて神と等しからしめ、彼に従屬することよりして吾々を解除する様に見える點よりして、其自身吾々の裡に存じ得るものゝ中最高貴なるものである。従つて其正しき使用は一切諸善の中最も大なるものである…… Le libre arbitre est de soy la chose la plus noble qui puisse estre en nous, d'autant qu'il nous rend en quelque facon pareils à Dieu & semble nous exempter de luy estre sujets, & que par consequent, son bon usage est le plus grand de tous nous. (ibidem, Oeuvres 5, 85)

以上、デカルトが吾々がそれを有することよりして吾々の裡に神の映像が宿るとし吾々自身が或意味に於て神に類似すると考へた意志の自由は唯の選擇の自由、單に自然的必然又は機械的必然に反對する意味の自由であつて、理性に合致する *venna* *Konüssig* といふことは含まれて居ない。併しデカルトの人性論に依れば理性に合致

した意志ほど機械的必然に反對の意味に於ける自由を高度に有せねばならぬ。何となればデカルトに依れば、吾々の意識作用 (cogitatio) 中に於て、認知作用 (perceptio) 中の外感覺 (sensus externi) 及び記憶 (memoria)、及び意志作用 (volitio) 中の感情 (affectus) 及び自然衝動 (appetitus naturales affectus) と共に内感覺 us sensus interni を構成する) が精神が肉體と結付く結果として起るもの (mens unia cum corpora) であるに對して、認知作用中の純粹思惟 (intellectus) 及び意志作用の純粹意志 (voluntas) は純粹に精神のみの作用 (mens sola) である。而して機械的必然性は物質の本性に屬し自由は精神の本性に屬するが故に吾々の意志は感情や自然衝動を離脱するだけそれだけ又た機械的必然性を離脱せねばならぬ。斯くて唯の選擇の自由は其れが理性に合致するに應じて高度に進まねばならぬ。吾々の意志の自由の能性は無限である。併し其能性の實現は感情や自然衝動の妨害に依て制限せられて居る。従つて理性に依ての感情及び自然衝動の克服若くば指導はやがて吾々の裡に於ける此無限の性能を充分に發現せしめる所以である。斯くて自由の充分なる發現は其れの「正しき使用」(bon usago) に依て初めて可能である。斯くて自由意志の充分なる實現と一致するその「正しき使用」は吾々自身に於ける神的性能又は神的原理とも言はるべきもの

の發現として「一切諸善中の最大なるものである。」

私は吾々自身を尊敬し得る充分の理由を吾々に與へる唯一つのものを知る。其れは即ち吾々の自由意志の使用、及び欲望に對して吾々が有する支配 (*L'usage de nostre libre arbitre, & l'empire que nous avons sur nos volontez*) である。……此意志は吾々をして吾々自身の主人たらしめることに依て、或仕方にて於て吾々をして神に類似せしめる。(…… il nous rend en quelque facon se semblables à Dieu, en nous faisant maîtres de nous memes) (*Les Passions de l'Âme III, CH. II*)

斯くして自由意志は情欲及び衝動に對して偉大なる威力を有し、而して此威力を行使することに依て初めて其本性を發揮し得るものとして、カントが感性を越えて至上の力を有するとした「吾々の裡に於ける超感的者 (*das Uebersinnliche in uns*)」と同じものである。而してカントの場合と同様其自身或意味に於て神的なるものとして吾々の裡に於て眞に尊敬の價值を有する唯一のものである。即ち此處に、*„feierliche Majestät des Gesetzes“*, *„Eiligkeit des Gesetzes“*, *„Pflicht! du erhöhener, grosser Name“* と云々が如き語に現はれて居るカントの崇高なる倫理思想が、カントほどの *Pathos* を伴つては居ないが、デカルトにも明かに存じて居る。

五

カントに依れば人格性の理念は「吾々の本性の高貴(其本分より見て)を吾々に示し

て、自尊の念を喚起すると共に、又た此理念に關して吾々の行爲の適合性の缺乏を注意せしめて、自負を破碎して謙抑の念を喚起す。眞の自尊と眞の謙抑とは互に手を携へて行く。デカールに於ても亦此に相當する思想が其感情論に可なり明確に現はれて居る。

知らるゝ如くデカールは驚異 (admiration)、愛 (amour) 及び憎 (haine)、慾求 (desir)、喜 (joye) 及び悲 (tristesse) の六根本的感情を想定して、他の一切の感情をば其れの派生的變形として説明せんとした (II, LXIX)。其中吾々の題目に必要であるのは驚異及び其れの變形感情である。驚異はデカールに依れば、稀有なる、異常なる、不意なる印象(デカールは之を生理的に見る)を興ふる對象に依て喚起さるゝ無關心の感情である (II, LXXI)。(デカールの感情の生理的の説明は此處には一切省略する以下同様。) 他の基本的感情は凡て印象が吾々の生存に對して有用なるか若しくは有害なるかに依て起る關心的感情であるが、驚異は唯其對象が異常なることに依て起る純觀照的、純無關心の感情である。

此驚異は其對象の異常性が小なる點に、あか、大なる點にあるか、又此對象が吾々自身なるか他の存在者なるかに依て種々の變種を生ずる。大なる對象に對して起

る驚異に依て尊敬 (estime) の感情が成立ち、小なる對象に對して起る驚異に依て輕視 (mépris) の感情が成立つ。estime 及 mépris の兩語は普通或物の價值に關する意見を示すのであるが、此處では此意見に結付くところの感情を意味する此兩者が已れに向ふは時に自尊 (générosité) 若くは自負 (orgueil) 謙抑 (humilité) 若くは卑屈 (faiblesse) となり、他人に向ふときには崇敬 (vénération) 若くは輕蔑 (dédain) となる。但し自己の尊敬に於ても輕視に於ても道德的なるものと然らざるものがある。自尊と謙抑とは前者であり、自負と卑屈とは後者である。然らば此正邪を判別する標準は何であるか。一般的に言つて眞に尊敬及輕視の對象となり得るものは自由的存在者のみである。眞に尊敬の對象たるべきものは唯一つ、其れは即ち吾々が依て以て感情及び衝動を支配し行くを得べき意志自由である。意志の自由は吾々の裡に於ける最高貴のものなると而して吾々は此自由を正當に用ゐるか不正當に用ゐるかに依ての外は稱讃若くは非難さるべきにあらざるとを知り、而して之を正當に使用せんと、の確固不動の決心を有する者にして初めて眞純なる自尊の感情の所有者であり得る。之に對して眞に輕視の對象なるべきものは唯一つ、其れは即ち意志の薄弱である。但し意志の自由は人生の諸善中最高貴なるものであるが、併し之を得んが爲めには吾々

は自餘一切の諸善をば之に對して全然無價値と見之よりして起る一切の感情を制御せんが爲に全力を盡して人生の弱味と戦はなければならぬ。吾々は眞摯と熱心とを以て此至善を獲得せんと努力する程、其弱味が如何に大なるか、人性が如何ほど薄弱なるかを深く感得し得る。即ち吾々自身の微力、薄弱の自覺は吾々の自由の爲めの精進に比例して高まる。斯くして眞の自尊は常に眞の謙抑と伴ふ。眞に自己の意志の自由の力の意識、其れに對する尊敬より起らざる自尊は凡て誤まれる自尊、自尊に非ずして自負、又は驕慢である。門地財産其他の外的諸善は言ふまでもなく、肉體並に精神上の天與の美質に依て自ら高しとするは皆な之に屬する。眞に自己の意志の微力と人性の薄弱との自覺より起らざる謙抑は眞の謙抑に非ずして卑屈である。運命に支配され、貧賤疾病等に依て失望し若くは自ら卑ふするは凡て之に屬する。運命に依て自ら卑ふする者は又た運命に依て自ら高ふするものでなければならぬ。斯くして自尊と謙抑とが常に相伴ふが如く、驕慢と卑屈とも常に結付く。即ちカントの言葉を借用すれば、人間は非神聖である、併し道德律、彼れ的人格に存する人は神聖犯すべからざる者である、後者に對するとき吾々は尊敬の念を起し、之と前者とを對比するとき自負を破碎して純なる謙抑の念を起す。自己に對する尊敬

の標準と同様他人に對する其れも亦意志の自由の力に存せねばならぬ。従つて人は一般に、自由的存在者であるといふ故を以て輕蔑されてはならぬ。自己の裡に於ける眞に尊貴なるものに對して尊敬を感ずると共に自己の微弱に對して謙抑を感ずるものは、單に外的善や運命に基く天稟の有無に依て他人を輕重せざるのみならず、その道德的微弱に對しても同情と寛容とを有すべきである。従つて、眞の自尊を感ずるものは決して他人を輕蔑することはなす。(III, CXLIX—CLIX)

* * * * *

斯くてカントの倫理説とデカートの其れとの間には可なり多くの點に於て重要な類縁が認められ得ると思ふ。尤も、同一の觀念であつても基礎づけの仕方には非常な相違がある。カントの其れが批判的なるに對してデカートの其れが多く其形而上學及び人性論的豫想の上に立つて居ることは前に多少接觸した通りである。尙ほデカートの倫理思想に重要な不備や不徹底や惡通俗やが數多く存することは已むを得ぬ。併し史上に於ける第一流哲學中に於て彼れほど倫理學的著作が量の上に於て貧弱なる上に斷片的なるものは稀であると思はるゝに拘らず其貧弱にし

て断片的な材料中にはカント前の何れの哲學者の思想中にも發見されるゝことの出
來ぬ多くカントとの類似點が發見されると思ふ。

引用書の頁付けは *Meditationes* は一九〇一年 Guttler 編纂のもの、*Oeuvres* は一八九七—一九一三年の記念出版のもの、カン
ト全集は *Kirchmann, Vsslander* 等の編纂のものに據じた。